

第2回淡路夢舞台の創造的再生に向けた検討会 議事概要

1 日 時 令和7年8月1日（金） 10：00～12：00

2 場 所 県庁3号館6階第5委員会室

- 3 報 告
- (1) 淡路夢舞台施設の今後の方針性
 - (2) 淡路夢舞台の果たすべき役割、将来ビジョン
 - (3) 検討状況・スケジュール

4 意見交換

(1) コンセプト・方向性に関するご意見

ア 夢舞台施設全体・共通

- ・淡路夢舞台の再生にあたっては、従来の「環境再生」の象徴としての施設群（温室、野外劇場、百段苑、灘山緑地）を、現代の社会的価値観に即した「新たな環境再生」の象徴へと再定義する必要がある。
- ・また、淡路島全体を瀬戸内文化圏の一部として位置づけ、夢舞台がその中核拠点となるようなビジョンを描くべきである。
- ・ビジョン・コンセプトは未来永劫変わらないものではなく、根底は変わらなくとも、時代の変化に応じた適切な方向転換を許容し、公と民間とで適宜協議を重ねるという建付けもあるのではないか。
- ・国際会議場は淡路市の災害対策本部の代替施設としての役割を担っており、また交流の中核施設としての歴史もあるため、夢舞台全体のビジョンに照らして、これらの機能は維持してほしい。
- ・5年、10年先を見据えたキーコンセプトを示すのが望ましい。
- ・当該施設は「コミュニケーション文明の創造」をうたった一連の事業の成果である。「グローバルなコミュニケーションの架け橋」というコンセプトが初期設定であり、基点である。今後のコンセプトでも「国際的なコミュニケーションの場」という役割は、必要かつ重要な要素ではないか。
- ・淡路島がビヨンドSDGsなどの自然共生を実施している日本のモデル地域であるとブランディングし、世界中に発信できれば、観光誘客や地域振興に確実につながると考えられる。
- ・特に、「人と自然のコミュニケーション」という理念はいまなお有効であり、これを淡路島全体のブランドとして再構築することで、世界的に評価される地域となる可能性がある。

イ ホテル

- ・政策的なコミットメントの観点では、県が土地を所有し続けるメリットもあるが、民間事業者の活力導入を阻害する恐れもある。
- ・土地所有者として県が関与し続けるスキームも検討しうるが、協議体を組成して運営することで、県の意向は一定担保することが可能と考える。
- ・県の財政健全化を早期に図るためにも、土地と建物の一体売却が望ましい。
- ・民間事業者の活力を最大限に引き出すためにも土地と建物は一体的に譲渡すべき。また、土地を譲渡対象に含めることによって資金調達の負担が増すことで、事業者の早期撤退リスクが低減する可能性もある。
- ・公募の際には、一定の転売防止策や長期でみたときの再投資への意欲の確認などがあるとよい。

- ・ホテルのターゲット層については、モダンラグジュアリー層に限定する必要はなく、リトリートやウェルネス、サステナブル、エシカルといった機能を重視したホテルとすることで、より広範な層に訴求できる。

ウ 国際会議場

- ・国際会議場は、現状の稼働率が25%以下であり、損益分岐点とされる60%の達成は困難と見られる。周辺施設との競争も激化しており、民間活力の導入は現実的ではない。
- ・これまで果たしてきた役割は評価すべきだが、時代の変化によりその役割を継続することが難しくなっている。施設のあり方そのものを検討すべきである。
- ・国際会議場は、今後どのように使われるかなど、現時点で方向性が不明瞭に思われる。
- ・現在予約済みの会議もある状況で、ホテルを譲渡した場合に誰が運営するのかが懸念される。

《事務局回答》

- ・国際会議場の耐用年数を踏まえて今後も利用できる施設と見ており、可能な限り有効利用を検討したい。その選択肢として、ホテルとの一体売却、または、ホテルと切り離しての売却を想定している。
- ・単体の事業収益は赤字だが、余力のある民間事業者や、夢舞台にポテンシャルがあると考える民間事業者に売却したい。売却できない可能性もあるが、その場合はあらゆる手段を検討したい。

エ その他施設（温室、野外劇場、百段苑、灘山緑地、交流の翼港）

- ・温室と野外劇場は個別での集客が難しく、民間事業者からの関心も低いため、将来ビジョンに基づいて維持の是非を判断すべき。百段苑、灘山緑地、交流の翼港については、公共施設として県が所有することに異存はない。
- ・交流の翼港については、兵庫県域の大坂湾ベイエリア活性化基本方針の中で、瀬戸内文化圏の拡大や、アートを踏まえた自然再生なども検討しており、全体方針次第では維持すべきと見ている。
- ・交流の翼港も含め、収益性の向上という課題はあれど、環境学習や阪神・淡路大震災の被災者の鎮魂など、公共的な役割がはっきりしている。環境再生などの物語性をもって役割を果たしていくことは、淡路夢舞台の活性化にあたっても大事な要素ではないか。

《事務局回答》

- ・野外劇場は公共施設として維持する方針。都市公園として周辺広場と一緒に活用することも検討中。

(2) スキーム等に関するご意見

- ・夢舞台施設の再生にあたっては県として揺るがない「核心」となる価値や役割を示し、特に重要視する機能を明確に定めたうえで、それ以外の部分は民間事業者に自由な提案を求める形が望ましい。
- ・民間事業者には、県の想いに共感してもらい、共に理想を達成するように働きかける必要がある。
- ・施設の理想像を県が一方的に定めるのではなく、民間との対話を通じて柔軟なスキームを構築すべき。

公 表

- ・協議体による運営は現実的だが、将来的にはより持続可能な運営体制の検討が必要。民間事業者の提案の自由度を確保しつつ、県として一定の制約や要望を設けることで、公共性と収益性の両立をはかることも考えられるのではないか。

(3) 県としての方向性に関するご意見

- ・今後の観光は、観光客だけでなく地域住民も幸福になる体験が求められる。淡路島を自然共生のモデル地域として世界に発信するためには、「エシカル」や「新しいコミュニケーション文明」といった観点を取り入れたビジョンが必要。
- ・公募条件の提示は慎重に行い、民間事業者の参画意欲を損なわないよう配慮が必要。特に、既存施設の活用や撤去に関する条件は柔軟に設定すべき。
- ・地域間交流や国際交流を含む観光交流のあり方を盛り込んだビジョンが望ましい。

以上